

(課題)・作品・演奏を端的に表したキャッチフレーズ (40 字未満)

「制作の扉をたたく。考える牛。」

・何がしたいか (800～1000 字)

大学に入って、初めての課題が牛のブロンズ像を作ることでした。今までにも、粘土だけで形をつくる塑像の経験は、高校の実習で少しはありました。しかし、近江黒毛和牛の様な大型動物をモチーフ対象にしたことはなく、また餌やり、掃除など世話も全て生徒自身で行うことは、初めての経験でした。

教授からは、彫刻家としての心構えを教えてくださいました。どんな内容かという、彫刻家ロダンが書き記した「若き芸術家たちに」というタイトルの文章から言葉を紹介していただいたり、アイデアについて、「インスピレーションは何もない空から降ってくるのではなく、とにかく手を動かすこと、体を動かすと頭も動く。」などです。教授がおっしゃった中でも、特に印象深かったのが、「影を追ってはいけない」というのと、「牛の過去現在未来」の時間も像を見て、感じ取れるようにということです。この事については、後期の実習が終わった今も、言葉の意味を考えています。牛を作る時、影を追っている状態というのは、形の外側のラインをなぞった様に、見たまを粘土に置き換えて、ただ外見をそっくりにした状態であると思います。一見牛のように見えるのですが、この状態で完成ではいけないのです。彫像として自立するには、牛らしきがその骨格や、脚、爪などの雰囲気表れていて、面と面の力関係という点まで意識して制作することが、影を追わない、ということなのではないかと、考えています。そうすることで、より牛の生き生きした像になり、「牛の過去現在未来」の時間が見る人の心の中に、生まれてくるのではないかと思います。

2回生の前期は引き続き、基礎実習をします。扱う素材は、金属・樹脂・石です。金属などは大学の大きな設備がないとなかなか扱えるものではないので、楽しみです。あと2月中旬に行われた、制作展の合評で、物理的に凹んでいるからといって、凹んでいるように見えるとは限らないということを指摘されました。凹みの部分を凹んでいるように見せるには、その周囲の部分が、その凹みの部分に、どのような力を作用させているのかを意識して形を作っていくといけません。この指摘された点を踏まえた上で、今まで制作に使用したことがない、素材を使い、制作がしたいです。